

内藤豊昭先生の思い出

自然科学研究所 水崎 高浩

内藤先生の突然の訃報に接したのは12月9日午後でした。にわかには信じられないことでしたが、今年度内藤先生と一緒に定年を迎える伊東先生が電話で静かにお話してくださいました。12月も過ぎ、定年を迎える先生方の送別会を自然科学の教員でまさにその準備していたところであり、突然のお別れに驚き、悲しみを感じると同時に、科目責任者として内藤先生の授業の教務的な対応に追われました。

内藤先生の授業の代講をするにあたり、先生が書かれたシラバスを確認したところ、講義内容に加え、内藤先生の物理学への思いや大学の授業への考えを知ることができました。シラバスには、授業の目的として、物理学102では「1. 物理学はロマンに満ちた楽しいものであること、2. 得られた自然法則が簡単で美しいものであること、3. これらの法則を通じて複雑な自然現象が簡単に、かつ、統一的に理解できること」が挙げられており、物理学302では「諸君の自然を見る目を広げ、さらに物理学は人間の作り上げたロマンに溢れたものであることおよび人間の能力の偉大さを認識して頂きたい」と書かれています。物理学はロマンとはほど遠いものとする人がほとんどであろうと思いますが、私も内藤先生と同じように考えています。物理学は無数の重要な成果を生み出した学問ですが個々の結果というよりも、真理の探求そのもののありようを教えたいというお考えなのだと思います。

シラバスの履修の留意点には、物理学は積み重ねの学問であること、そのため、前期後期の両方の履修を強く希望する旨が書かれています。内藤先生から半期化する前の教養科目のカリキュラムに尽力された話を何度も聞く機会がありました。それが、2008年頃に時代の流れに対応すべく半期化せざるをえなくなりカリキュラムを変更することになったのに対して、教養教育のレベルを下げるとひどく憤慨されておりました。半期化の弊害を最小化すべく、ご自身の授業では、物理学という長編のロマンを語るため、1年通しての受講を強くご希望されていたことがわかりました。

この9月、内藤先生の研究室で、先生と来年度着任予定の先生とで相談する機会がありました。そこで、私は、内藤先生の定年退職を祝う研究会を自然科学研究所で開催したいと相談しました。はじめはそんなのはいいよといわれましたが、自然科学研究会の研究所への格上げに尽力したのは、内藤先生と近藤先生（一昨年定年退職）であることをいい、また、先生が一番力をいれた研究を話してくださいと頼みました。噂で在外研究を2年とったと聞いていたので、在外研究で行ったオランダでの研究はどうでしょうかと頼んだところ、内藤先生にとっては忘れがたい思い出のようで、楽しそうな気分で快く引き受けてくださいました。中村先生に聞いたところ、内藤先生は1989年から2年間在外研究でオランダに行かれたようで、2年目の延長は休職ということで実現したそうです。古き良き時代だったようです。私は内藤先生の授業の代講のため通夜しかいけませんでした。葬儀の中でも友人によって、内藤先生はオランダでの在外研究時代が公私ともに最も充実した時期であったことが語られたそうです。

内藤先生の研究に関する紹介は、自然科学研究所報のほうで別稿としたいと思いますが、内藤先生は、統計物理学の分野で活躍され、非平衡分子動力学による粘性抵抗について長年、研究されました。2007年の物理学会誌に先生が書かれた研究のまとめが載っています。また、内藤先生の研究室の本棚の上には、計算機センターでの計算のアウトプットがいくつも積まれていました。昔の大型計算機センターを知るものとしては、両脇に紙送り用の穴が空いた幅広の紙のバインドされたものなので、一目でそれとわかります。活発に研究なされていたのだろうと容易に想像できました。残念なのは、もはやオランダでの在外研究でのエピソードも研究についても聞くことはできなくなってしまったことです。

私が専大にきたのは2000年ですので、若かりし頃の内藤先生の思い出を語ることはできませんが、二つほど中村先生から伺ったことを記しておきたいと思います。一つは、情報科学研究所の立ち上げの頃、自然科学系の仲間を集め、先生が幹事となり、輪講討論形式で、H. ハーケンの「共同現象の数理」をテキストに、物理、生物、化学系における自律形成の理論的研究を行ったことです。理系学部のない専大において積極的に自然科学の活動をされていました。二つ目は、専修大学の計算機システム、情報科学センターの発展にも内藤先生の多大な寄与があったことです。内藤先生がオランダに在外研究に行かれた頃は、私としては大学院生の頃にあたります。当時は思い返せば、大学にはベクトル型スーパーコンピュータを主とする batch job を処理する大型計算機センターがありましたが、物理学の研究室には、DECNET で繋がった（今はなきDEC社の）interactive で使いやすいワークステーションがあり、物理の研究者間ではすでに e メールが行えるようになっていました。それが、unix と internet へと変化し始めた頃だと思います。また、同じ頃、CERN（最近、ヒッグス粒子発見という快挙をなしたスイスにある素粒子物理学の国際的な研究所）では WORLD WIDE WEB も登場しました。こういう計算機の昔話を書き始めるとつい長くなってしまっていますが、いつの時代も物理学者は最先端の計算機環境を生み出し、使いこなし

てきたといえるでしょう。在外研究から帰国したばかりの内藤先生は、スイスの CERN にインターネットでつなげるなど、そういう新しい状況を専大にいち早く持ち込んだのではないかと思います。

最後に、ここ数年、内藤先生のご健康に私なりに注意を払い、やや失礼だったかもしれませんが年齢相応にご健康に留意するように申し上げたこともありました。定年まで無事に全う出来なかったのは、本当に残念です。ご冥福をお祈りいたします。